



1994. 3. 1 発行

さっぽろ

郵便振替 小樽 1-570

NO. 180	みづられけは	今月通信担当
	連続、細田(644-2927)	高橋芳恵

今月の内容

無理せず息長く……	1	やまと「異性愛強制」
賀状・ありがとう……	2	社会「なよ……」
ベンハ・ペタ・子供共和国 もと・みどり・ニヒカ		キッテンの水音
ひきそらな	3,4,5	情報

通信購読料 1940円+60円(振込手数料)

「力ましのお手紙もいよいよ頂いて
こともあづらえし愧は女たちの思ふと
伝えていきます

無理せず「息ながく——ことのもあづらえ愧はからだによいやり方で
すすめています。1.2月号は合併号とさせて頂いた。みんなでんなに
ヒコラやっているつもりはないだけれど、1ヶ月発行や一休めというのや
こんなに気や・隼なものがとうことと味わいた。
編集・発送がもうパートナ化されて、月のリズムが
なっているので、休みを取るのはじめて、けっこう。(人とい
ことなんがーと今やった次第。郵便代も値上
かりし・購読料のアップか……と考えたけれど、
値上げはちょっと、すえおきて、これまでの毎月
発行を、年10回とし、1.2月号と5.6月号を
合併号とさせて顶きます。

「こんな素敵なお通信が消えるなんて、全国の
女たちがどんなにかっかりすることか。とにかく
存続おめでとう」という力ましの言葉に支えられて…
80歳になつても元げたいナ。(エ? すぐだ?)





イラスト/佐藤英紀

小さな声のあなたと私が集まって、いつか、まじょりてい(英語で多数派の意)になれたら…

新しい年に

昨年の衆院選では多大なお励ましをいただき本当にありがとうございました。不本意な結果に終り、政治の大転換の時に議会から発言できない事がとても残念です。

衆院選後の三井マリ子は「男女平等の政策化」「福祉社会と女性政治家」のテーマで各地を飛び回り、秋には、国際会議「開発と女性」に日本代表として参加し、世界80ヶ国1200人の人々と語り合いました。今年4月には、E.C.本部の招聘を受けE.C.諸国の女性施策研究に携わります。「不思議の国のセクハラ」(集英社)も近日刊行です。

三井マリ子は、高校教師(13年)、東京都議(6年)、女性運動家(20年)の経験を生かしながら、これからも公正と正義に満ちた政治をめざして元気に活動を続けます。今後ともご指導をお願いいたします。

1994年、新しい年が皆様にとって素晴らしい年でありますように。

元氣です。2/13

阿佐谷の事務所は「三井マリ子と新しい政治を創る会」引越しました。へのご連絡は下記へお願いします

〒168 東京都杉並区下高井戸4-41-5
TEL.03-3329-1298 FAX.03-3329-6068

三井マリ子

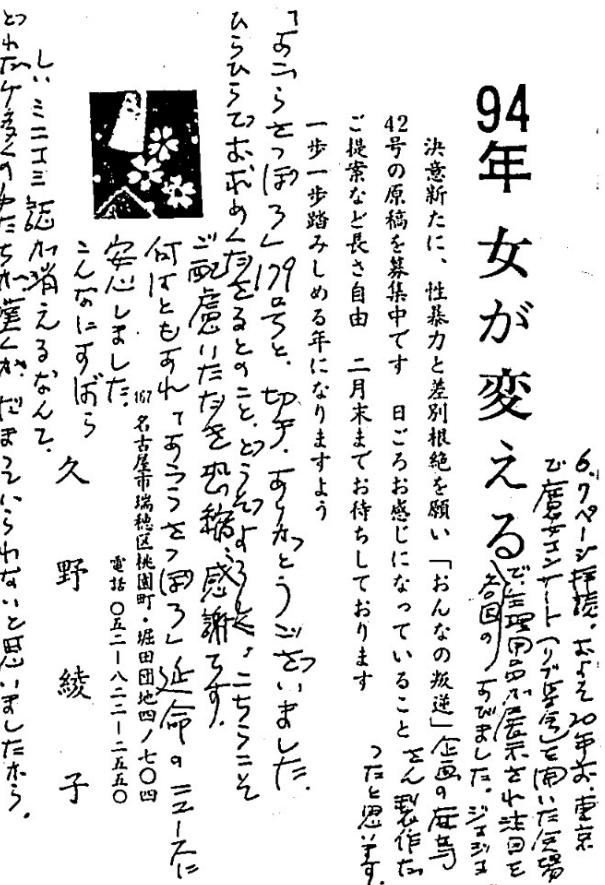
貴様、たくさん、ありがとうございました。
とても感動的になりました。

本年もどうぞよろしくお願ひ致します

1994.1.1

私は今まで浦島太郎、伏見からお友達山中はずつと歩き、この貴重な経験をかこにして又自立へのステップを着実にしたいと思っております。基本的には経済的自立のもとに単身留学でしたことは「あこら」に聞かれて「あこら、で育ったからこそ、ここまで来られた、というか実感です。」「あこら」はしに今の私も今夫婦関係も送り得つかないとつくづく思います。又さらには飛躍しています。

加我博子



ベンボンポスター子供共和国って知ってる?

1月 26日

木ヒコは、私が誇りに思っている友人のひとりである。彼女は非暴力の人で、湾岸戦争の時、札幌の地下街で、なんの気負いもなく、淡々と、しかし岩のように強さで、難踏の中、ひとり座って反対していた姿は、通常人の心を打つた。エネメイトにもひとり乗り込み、科学技術庁前でハシストを続けた。

フレアーノ・ケンさんも、男に厳しく、何か"マル"をつけている人である。

その二人の子どもが、ベンボンポスターに行くことになった。仲間たちとは、誰も驚かない。

ごく自然の流れとして塔、受けとめたのだろう。旅をしている人は、いつも

でも泊れるあたたかい家族で、平和行進の人の常宿となっている。最初に伺った時、一家8人の見事なチームワークで、あ、という間に、ヘルシーでおいしい料理…並んだ。食後、当番の木里ちゃん(6才)や、ベスティ・カミナーラ、山田洗いをしていてやー、みんなやー、暖かい目で見守っていた。自由と、助けあう喜びや、いつもあふれていて、いつ遊びに行っても気持ちよく帰ってこられる。年に一度、一家でアジアを旅するのに、子どもたちも新規配達といわない。

今回もTVのアナウンサー「着いたら何をしたいですか?」と聞いたら、すみれちゃんや、「仕事をしたい」と答え、カットされたとのこと。彼女にとって、仕事ということは、生活者として当然のことであり、おしつけられるものと思つてしまふ。私は日本の中学校に未練はないのか、聞いてみた。既産に「ない」と異口同音に答え、「友だちは楽しいけどね」と二人で顔見合せた。学校のウソとちゃんと見ぬいてるのである。「いつも帰ってきていいよ」と、う両親の声に愛といつぱい感じて、スペインの空の下、元気にやっていくことだらう。ケンと木ヒコに原稿をお願いしてのせるところになった。皆さんの感想をお待ちします。

日本で出来ないようなことがしたい
もっと面白いことが出来そうな気がする。

小林木ヒコ・ケン

94. 1月に、日本を離れスペインのベンボンポスターに向かった。

今回の旅立ちは、私達の子供二人(六人兄弟姉妹)の四番目と五番目の娘、宇未(13歳)、すみれ(10歳)が希望したスペインでの生活を実現するための最後の手伝いともいえる。

二人が、スペイン行きを考えたのは、ベンボンポスターが日本で公演したサーカスを紹介したニュース番組を見て「面白そうだね、私も行ってみたい」と言ったので「それじゃあ自分で手紙を書いてみたら」と話してからのことだった。

とりあえず自分達の思いを手紙に書き、それを学校の先生に手伝ってもらひながら英文に書き換えポストに投函した。

返事は以外に早く二週間くらいで戻ってきた、英語とスペイン語で書かれた返信には、入国を許可するので滞在に必要な書類を揃えてください、そして1月に会いましょうと市長のネルソンさんからの手紙だった。

すぐに飛行機の手配と留学のためのビザの申請、ベンポスタの学校に入るための在学証明（日本の）手続きと慣れないことをこなしていく。

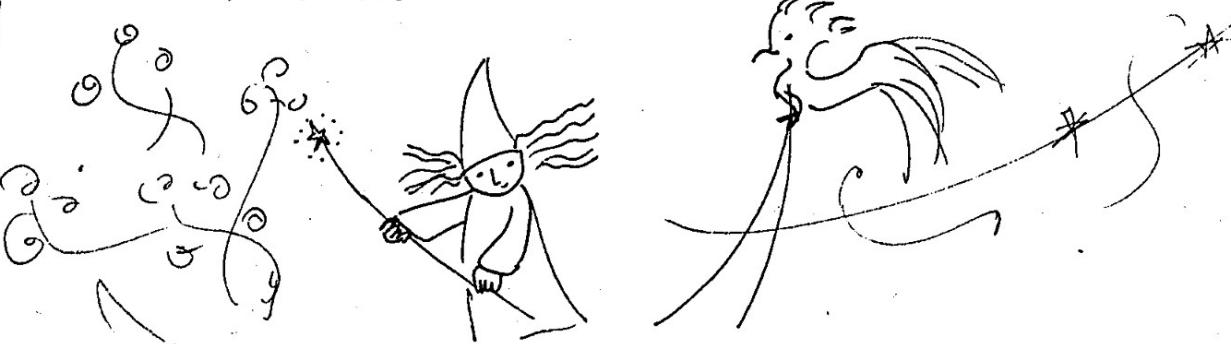
関係書類は当然のことながら全てスペイン語に直さなければならずスペイン語の辞書を片手に四苦八苦するが大使館や外務省相手の書類のやり取りでギブ・アップ！こりやどうしても、人の助けを借りないとどうにもならないとそこで、色々なところに連絡した所、親切な留学生が手伝ってくれる事になり、スムーズに手続きが出来た。



学校の方は、小、中学校共に前例がなく、子供だけで外国にすむことが納得できない、十分な説明を親の方からして欲しいと、学校から呼び出された、小学校では少しの説明で理解してくれたが、中学校の方は校長、教頭、担任の三人から「なぜ、そんなスペインなど行くのか」「日本に戻った時、どうするんだ」「何をしているところで、そこは大丈夫なのか」「親が納得しているのなら仕方ないが、子供のことを思うと賛成しかねる」とまるで理解をしようとしている。

1時間30分位話をして、最後には親子ともスペイン行きを決めているので関係書類は出しますと校長が言った。

僅か2ヶ月半の間に準備をし、職場の休みを取るようにして、あとは出発を待つだけになった。



ベンポスタ子供共和国はスペインの北部、ポルトガルに近いオレンセ市の郊外にある自由、平等、平和を基本理念に運営されている子供の共同体で、5歳～18歳の男女、約100人位が生活している。

付設している学校では、1年生から8年生まで1日5時間の授業があり、昼休みの後は、自分達の仕事をします。

主な収入源は、世界中を回るサーカスで、その他木工、陶器などを生産しています。

18歳以上の大人も何十人かいますがベンポスタでは、大人も子供も平等の扱いをうけ、明るく伸び伸びしている。

1月2日にスペインに入り、バルセロナ、バレンシア、マドリッドと家族旅行をし、いよいよ目的のオレンセ市のベンポスタへと向かった。

オレンセに着くと二人は、一刻も早くベンポスタへ行きたいと目を輝かせて言った、市内からバスに乗り、郊外のベンポスタのある丘で下車、まわりを見渡すとすみれが「やった！来た！」と喜んで「あそこの家、映画であったね！」と嬉しそうに言う。

どうとう、ベンポスタに来たという思いで胸が熱くなる。坂道を上がって行くと誰もいない入り口のゲートがあった。3年前に見たベンポスタの映画に出てきた、あの場所だ！

遠くにベンポスタの中心部が見える、誰か人が出て来てこちらを見ている。子供達と一緒に歩いて行き、オラ！と声をかける。ネルソンさんに会いたい、となんとか伝える。少し待ってと中の一人が呼びに行ってくれる、ネルソンさんが来るがなんだか様子がおかしい、スペイン語が話せるかと聞かれたがほとんど解からないと言うと誰かを呼びにやった、モナという日本人の女の子が来てくれ、通訳をしてくれることになった。

話しただと、うみ、すみれの他、兄、姉、弟の5人を見て、みんなベンポスタに残るのかと思ったらしい、ネルソンさんが書いた手紙を見せて欲しいと言ってきたが、「手紙は持っていない、残るのはうみ、すみれの2人だけです」と伝えてやっと解かったらしい。

ベンポスタに入国するための書類を渡したあとにモナがベンポスタを案内してくれた、これから二人が生活していくそれぞれの施設を見て歩いた。

ベンポスタは見渡しのよい丘にあり、自然の中にサーカス小屋（大きなドーム型）、学校、住居、馬小屋、畑、喫茶室等があり、簡素だがベンポスタのこれまでの、変わらない何かがあるように感じられた。

二人は夜の全員出席の住民会議の場での自己紹介がうまくできるかと、少し緊張していた。その日のうちに部屋が決まり、こうして、二人の娘のベンポスタでの新しい生活のスタートは始まった。

二人を残し、ベンポスタから市内の宿に帰り、明日、もう一度来ることにする。

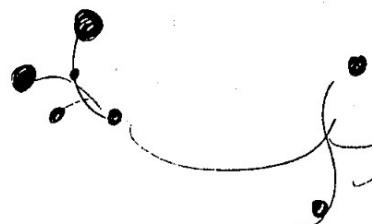
翌日、二人に会うと「学校はスゴ～ク面白いよ、特に音楽、それに、もう友達が出来たんだよ！」と元気よく言っていた。

もう何も心配することなく（特に心配もしていなかったが）ここで、二人はベンポスタの仲間達と暮らしていくことだろう。

帰るとき、末の息子、木里もベンポスタに入りたいと泣いていた。

ベンポスタ3日目、うみ、すみれにノートを届けて「これから日本へ帰るよ。」「元気でね」と別れを言うと「じゃあ・バイバイ」とあっさり別れの言葉が返ってきた。

しばらくの間は、会うこともないが、はなれていてもお互いを思いあえることができれば幸せじゃないかと思う。



やっぱり「異性愛強制社会」なのよ



ん~っ、わざわざ電話して、「書きたいことがあるんですつ！」と言って、1ページもらったくせに、文章がまとまらない、のたうちまわってます。——このまとまらなさは、今書こうとしている内容が、私にとって重要な部分（意識の深い部分、痛い部分と言った方がいいかも）に触れることだったんだなってことを、改めて悟らせてくれてしまった。ああ…。とりあえず、1ページだ！——要点だけ書こう。

1月30日、「ポルノグラフィーと“表現の自由”とフェミニズム」について話をしたあと、ふと考えた（というか思い出した）んだけど、私は“まっとう”な『恋愛もの』よりも、ある意味で『ポルノ』の方が見るのラクかもしれない。

確かに、気持ち悪くて“吐きそう”なことってあるんだけど、でも『ポルノ』なら、「気持ち悪い」って思ってもいいのよ。「気持ち悪い」って言ったとしても、誰も不思議に思わないでしょ？でもそれが“まっとう”な『恋愛もの』だったとしたら…そんなことってなかなか言えない。そう感じること自体が「恥ずかしい」ことのように感じているもの。

もし口にしたとしたら…それが十代の少年少女であれば、「まだ子供だな」と“性的に未成熟なことの証し”として、軽く笑ってすまされてしまうんだろうけど（それも失礼な話ではある）、この年になってそんなこと言ったら、ヘンタイ扱いされかねないと思ってしまうのよ。

だけどだけさ、これが『男女』じゃなくて、『男男』や『女女』だったら、平気で「気持ち悪い」って言ってしまう人は結構いるでしょう？『男女』の恋愛や性関係は、それが“当然”であり、“正しいこと”という「常識」があるから、「気持ち悪い」なんて思うのは筋じゃない、思っちゃいけないって思わされてきて、本当は「気持ち悪い」って思っても、それを自分で認められなくなってる。「そういうものなんだ」って、慣らされてしまっている。違和感があっても、常にその違和感があるという状態に慣れてしまつて、違和感があること自体を感じられなくなってる。

肉体のイメージだけで、『男男』や『女女』（の性的な関係）を想像すると「気持ち悪い」んだけど、でも同じやり方で、『男女』について想像してみると、やっぱり同じように「気持ち悪い」んだよね。



…ここ数年、私は自分のセクシュアリティがわからないと感じている。——自分はバイセクシュアルなのか、レズビアンなのか、それとも抑圧されたヘテロセクシュアルなのか…。そして「わからない」ということで、自分はレズビアンだという自覚のある人たちに対して、なんとなく引け目を感じていたんだ。いつまでも「わからない」のは、単なる怠慢じゃないかとか、コウモリのようにどちらのグループにも属しているようで、実はどちらからも仲間外れであるような、中ぶらりんな、何か“悪いこと”をしているような感覚。



2月5日の掛札悠子さんの講演会「女のセクシャリティの今」を聞いて、ちょっと安心しました。“じゃあ私が、レズビアンではなくヘテロだったとしても、「仲間」として認めてもらえるのね。”って。

それから…《私は○○です》というときの、私のアイデンティティは、“ヘテロか、レズビアンか、バイか”という区別よりも、セクシャル・アビュースの“サバイバー”であるという方が、より共鳴できる、ぴったりくるということに気づいて（少なくとも今現在の私においては）、そんなに汲々として、きちんと区別つけなきゃとあせる必要はないかも知れないなって、思えたこと——これは、ちょっとウレシイ「気づき」だった。

少しだけラクになれそうな、シアワセ気分を味わっている私でした♡

賀状の連名

キッチリの水音

ひと 北海道 社会

アルバイトに収められた十六枚の年賀状。夫が毎年、干支をモチーフに家族のイラストを描いていた。「これは下の子が生まれた年のだね」と、夫がページをめぐつた。家族の移り変わりが見えてくる。はがきの差出人は「遠部屋・高橋秀恵」の連名。住所は一つ。札幌市中央区の会社員、遠部屋さん(母)と嘱託職員、高橋秀恵さんは(母)は十六年間連れ添った夫婦。十五歳と千歳の娘が一人。三年前に夫婦別姓にするため「ペーペー離婚」した。娘は夫の姓。

「結婚したなら『戸籍制度は差別の根源』との想いで一致し、籍を入れなかつた。ところが間もなく、高橋さんの弟が結婚。その際、戸籍簿本に高橋さんの籍が残つているのが両親に知られた。『ほかの女の人が結婚したからですの』『子供を父無し子にする気か』。両親や親せきに責められ、妊娠中だった高橋さんは迷々、入籍した。

「夫の姓を名乗ることには自分が妻、母の意味でしかない。自分の顔がない」と入籍後も高橋の姓を使つた。母女が小学生時代の参観日、「遠部屋の母は高橋秀恵ですか」と四四〇席。『お母さん、かっこ悪いからやめて』。学校に来る者への争いは丑麗しなかつた。

押しつけられない
子供たちは自由…

二十二代だった一九七〇年代前半はワーマンリーの全盛期。「男女差別撤廃、女性の自立」が最大の関心事だった。だが、ミス・コンに反対する母の傍らで娘たちはナレヒの「美女コンテスト」にか



夫婦の生活基盤は同じでも、幹が「また」分かれるゆえに「個人」を大切に生きていく

じつは別姓のいいむ句も書わなこか、隠避してくるかとか本当にといひはわからぬ。

「がっかりするよな。でも、別姓も個人の自由を認めることが基本。子供に自分たちの価値の押しつけはできない」と一人は思ふ。

遠部さんは「戸籍は一緒でも、実態は夫婦をなしてないケースもたくさんある。家族のきずなは戸籍とは關係ない」という。高橋さんか「でも、夫婦をつみまひめるものなんであるんだろか。子供の面倒を見るだけ一人いたほうが便利だけど」と云ふれば、戸籍とは關係ない」と云ふ。高橋さんは「いや、答えが出るのは子供が巣立ったときかな」。一人に夫婦の親子ながりが見えてくるわけではなく。

けんかはよくある。ロミヨニケーションと感じてしまう。ペーペー離婚してくるのに「離婚のうしな」の文句が飛び交う。「なんかしなくなつたのよ」と云ふ。相手をあきらめてるつむじとかい。いつの原因は彼の想つ。誰かが言つてゐる。「あくのうがちよと悪いかな」

毎日新聞 194.1.3. こんな記事が載りました。
反響 待てます。

情報

- ・3月1日(火) 朝鮮独立運動記念 犠牲者追悼コンサート
17:45 開場、18:20 開演。会場：北海道教育会館 7F
漫劇・ムーラン・ロッホ。曲：鳳仙花、島唄他。^(S3 W12) 参加料 500円。

- ・3月5日(土) 映画会『水からの速達』(112分) 主催：『やから暮らし考え会』
14:00, 18:00~ 2回上映。会場：教育文化会館、1400円(前売1200円)

- ・3月7日(月) 金井淑子さんと座談会 18:30~ 奥村里子宅。

明日の講演に先立ち、私と話しあう場をもう下エスコンにてなります。

金井さんのかかげた本はちょっとむずかしいや。と思う人も、ヒザを支えての小人数の

話合には、何よりも元気をもらひ、又、元気アリーナもできること思います。

(夕食会、会費1000円 豊平橋 ← 36号線 → 月寒
まちみ大歓迎)

(参加希望者は、細田(644-2927)
谷(664-0632)
高橋(563-6917)まで)

奥村 宅、美園5丁目1-2 (tel 811-1097)

- ・3月8日(火) 第84回 国際女性デー (第36回 札幌集会)

「自分を生む。共に生きる」—国際家族年へ—

講師：金井淑子 5:30PM 開場、6:00PM 開演。会場：自治労会館(N6W7)

- ・4月2日(土) 河野貴代美講演会 「自分力の旅」

社会 ——カウンセリングの現場から——

17:30~19:30 福祉センター(大通り西19丁目) 参加費 1000円
主催：フェミニストカウンセリング 札幌準備会 共催：スベース・おん。

地位もお金もないけれど、沢山の友人かいじ。これが私の財産とてんと思ふ
今日はこうです。よろ。